

播磨町ただ一つの古墳 愛宕塚古墳

東播磨出土の埴輪から考える

愛宕塚古墳(兵庫県指定史跡)は、播磨町内に現存するただ一つの古墳です。古墳は、周囲に壕を巡らせた円墳で、埴輪などが出土していることから、明石川流域と加古川流域の大きな勢力の間に挟まれた地域の小豪族の墓と考えられます。今年度の特別展では、東播磨地域の代表的な古墳から出土した埴輪をとおして、愛宕塚古墳に葬られた人物に想いを寄せ古墳の意義を考えます。

平成23年 10月2日(日)～11月27日(日)

観覧無料

- 時間 / 午前9時30分～午後5時
- 休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
- 場所 / 播磨町郷土資料館 展示室

協力機関 明石市教育委員会・加古川市教育委員会・加西市教育委員会・神戸市教育委員会・高砂市教育委員会・兵庫県立考古博物館



朝顔形埴輪 (愛宕塚古墳)

壺形埴輪 (愛宕塚古墳)

人物埴輪 (加古川市 行者塚古墳)

家形埴輪 (加古川市 行者塚古墳)



愛宕塚古墳



鶏形埴輪 (加西市 クワンス塚古墳)



朝顔形埴輪 (加古川市 行者塚古墳)



筒埴輪 (加古川市 行者塚古墳)



短甲 (加古川市 行者塚古墳)



ミニチュア土器 (愛宕塚古墳)

◆播磨町ただ一つの古墳・愛宕塚古墳

播磨町北野添2丁目の住宅地のなかに、きれいに整備された土まんじゅうがあります。現在、播磨町内にただ一つ残る愛宕塚古墳です。直径22m、高さ2.5mほどの円形の古墳で、周りには幅4～5mの壕が巡らされています。かつて小規模な発掘調査が行われ、埴輪などが出土していますが、それ以上の詳しいことは分かっていません。

◆埴輪は古代の造形物の代表選手

古代の造形物で最も親しまれ、人気が高いのが埴輪です。馬や人物、家や船など様々な形のものが作られました。なかでも、人物埴輪はその表情やしぐさによって、古代の人々の息づかいを私たちに伝えてくれます。でも、こうした人物や動物は埴輪のなかでは少数派。一番多いのは土管のような円筒埴輪、朝顔形埴輪で、古墳の上や周囲に並べられました。



墳丘に並べられた円筒埴輪と朝顔形埴輪(神戸市 五色塚古墳)

◆埴輪誕生の秘話は想像のお話

奈良時代の歴史書『日本書紀』には、埴輪の起源について、次のようなことが書かれています。「貴人が死ぬと、家来たちをお墓のまわりに生き埋めにした。苦痛で家来たちは泣きつめき、死んだ後は犬や鳥が食い漁った。心を痛めた天皇は、野見宿禰の提案によって、生きた人の代わりに粘土で人や馬を作り、殉死を止めることにした」というお話です。しかし、人物や動物の埴輪は、埴輪の中では最も新しい時期に登場することが分かっています。この神話は埴輪のもっていた本当の意味が忘れられてしまい、後世の人々が想像した話のようです。

◆埴輪って何？

埴輪は、主に3世紀後半から6世紀後半にかけて作られ、お墓である古墳の上や周囲などに並べられました。埴輪は元々、弥生時代の終わりごろ、岡山県を中心とした吉備地方の首長の墓に使用された特別な壺と壺を置く台(特殊器台・特殊壺)から発展したものです。

◆埴輪のもつ意味の研究は進んできた

埴輪は300年間も続いたわけですから、時代とともにその意味も少しずつ変わっていったようです。埴輪のもつ意味も様々な考えがありますが、死者への食物供献儀礼(特殊器台形埴輪)、死者の眠る場所を荘厳化し聖域を区画し、悪霊が入り込むのを防ぐ(円筒埴輪・器財埴輪)、外界と死後の世界をつなぐ依代(家形埴輪)、首長儀礼の表現(人物埴輪・動物埴輪)など、古墳に埴輪を並び立てる意味も、新しい種類の埴輪が作られるたびに、それまでの形も残しながら新しい要素を付け加えていきました。特に人物埴輪が登場する5世紀中ごろ以降とそれ以前では、埴輪の意味も大きく違ってきます。

